

平成18年度

『海星高等学校』ながさき私学活性化事業

実施報告書

1. 事業計画

事業の概要、テーマ及び目的

現状の進学状況を反省し、昨年度より四年制大学への進学率の向上を目指す

テーマ：学校活性化のための授業改革と授業評価

目的：教員の研究授業の充実と生徒の学力向上を図る

事業計画

- ・ 視聴覚機器による研究授業
- ・ 大学と大手予備校講師による公開授業、研修等

事業実施にあたって特筆すべき点

- ・ 生徒保護者、地域の学校の生徒と教員の授業参観と授業評価

期待される効果

- ・ 教員の学習指導のスキル向上と生徒の学力向上

2. 実施報告

事業の概要、テーマ及び目的

『 授業改革と授業評価 』

各私立学校は『建学の精神』に基づき、特色ある教育を行い、社会に対し多大なる貢献を果たしてきた。

しかし、少子化による生徒数激減、また社会経済の変化により私学を取り巻く状況は厳しい。

そのため県は、公教育支援の一環として「私学活性化事業」を九州では初めて行うことに決定した。応募19校のうち14校が指定を受け、今後3年間『ながさき私学活性化事業』により各校それぞれが他校にない特色・魅力を築いていく。

海星高等学校は特に、受験指導に力を入れることを骨子として応募。同じく受験指導を中心として応募・指定を受けた4校中の1校に選ばれた。

生徒の学力の質的向上には、生徒本人の自覚と各教員の受験指導のスキル向上が課題となる。

そこでまず、達成感の付与(目標なくして達成なし。明確な目的を持って授業に臨む姿勢の確立)を目的として大手予備校から講師を招き、本校生徒に対し数学・現代文・英語の3教科について講義を実施した。講義は公開講義とし、地域の学校関係者、保護者、教員が参観した。

更に本校では数年前から『生徒による授業評価』を実施しており、教員の授業が独善的になっていないかアンケートを取っている。今回はそれに加え、視聴覚機器を利用した研究授業等の事業を実施し、客観的に自己分析を行わせ、今後の課題について教科内討議を実施させた。

これらを通して、現状の進学状況を反省し昨年度より四年制大学への進学率を向上させる。

具体的な数値目標として、国公立大学合格率を現状の19.2%から30%へと設定。目標の達成を図っている。

事業計画

『 夏期学力養成公開講義 』

実施日	平成18年8月3日(木) ~ 4日(金)
対象	高校1年男女共学ステラマリスクラス・高校2年特進Kクラス
公開対象	地域学校関係者・本校保護者

大手予備校から名物講師を招いての公開講義。1コマを90分に設定し、数学・現代文・英語の3教科を実施した。

(数学) 10:30 ~ 12:00

『 数学の問題の解き方 - 数理パズルから入試問題へ 』

(現代文) 12:40 ~ 14:10

『 まずセンター現代文を解くための論理の仕組み(構造)を説明し、次いでそれらを小問形式の具体例に適応し、最後に04年度センター評論を解いてセンターの全貌をとらえて行く 』

(英語) 14:30 ~ 16:00

『 単に英語ができるということと大学入試で点がとれるということは別物であり、後者を達成するためには何をどう学習する必要があるのか説明する 』

『 夏期教職員研修会 』

実施日 平成18年8月31日(木)

対象 本校教職員

研修テーマ 教職員のための『 7つの習慣 』

外部から講師を招いての研修

『 7つの習慣 』とは…

世界で一番売れているといわれるビジネス書。(1500万部)

米国のスティーブン・コビー博士が「成功する為の7つの原則」を整理・体系化した。

日本でも1996年に翻訳され150万部を超えるベストセラーになった。

また、ビジネスマン向けの研修プログラムとして確立されており、日本でも延べ10万人が研修を受けている。

ビジネスマン向けの『7つの習慣』は、「7時間×3日間」。今回の教職員研修はこの内容のエッセンスを抽出し、3時間に圧縮して実施した。

第1の習慣

〔主体性を発揮する〕

自分の価値観に基づき反応を選択する。

自分の行動に対する責任をとる。

影響の輪に集中する。

第2の習慣

〔目的を持って始める〕

終わりを考えてから始める。

何が自分にとって一番大事なことなのか？

第3の習慣

〔重要事項を優先する〕

一番大切なことを優先する。

第4の習慣

〔Win-Winを考える〕

“私も勝って、あなたも勝つ”というパラダイム。

第5の習慣

〔理解してから理解される〕

まず相手を理解して次に理解される。

第6の習慣

〔相乗効果を発揮する〕

第7の習慣

〔刃を研ぐ〕

自分を磨く

上記の『7つの習慣』を段階的に学び、繰り返し行うことで、自信・自己肯定感を養っていく。

『 授業力向上の研修 』

実施日 平成19年3月7日(水)

対象 本校教員

大手予備校講師を招いての研修

研修第1部 『 学習指導スキル研修 』

学校全体で授業力向上を目指した共通認識の形成。よりよい授業の実現。学校としての説明責任について。

(よりよい授業の実現)

1. 生徒の進路希望実現の可能性向上
2. 教師側の達成感(=継続的研鑽への原動力)
3. 要件の整理と理解+解決手法への知的拡充

(学校としての説明責任)

1. 志願者に対する学力像・授業観の提示
学校が保障する「学力」と教員個々の「教科観・授業観」との整合と、地域への告知
2. 学校と地域の信頼形成
「目標明示」と「達成状況告知」。達成を担保とする手段の提示

研修第2部 『 ビデオ講義研究 』

英語・数学・古文・化学・世界史の各教科にわかれて、大手予備校講義(90分)を視聴。事前に要望を提出し、それに沿った講義研究であった。

【事前要望】

(英語)

学習効果と生徒の学習意欲を高める工夫と要件について、具体的に事例をより多く知りたい。その点を数多く例示してほしい。

(数学)

「場合の数・確率」について

(古文)特記事項なし。

(化学)

- 1, 無機物質のまとめ方(族でまとめるのか、周期でまとめるのか 周期表との関係)
- 2, 酸化還元反応(PH計算・指数の扱い方・数学の兼ね合い)
- 3, 電池・電気分解(イオン反応式の覚え方)
- 4, ヘスの法則計算のやり方

(世界史)

- 1, 暗記科目というイメージが定着しており、生徒の学習意欲を低下させている。興味や関心を持たせるような史料(教材)を紹介してほしい。
- 2, 各国史や世紀ごとの重要事項をどのようにまとめて生徒に理解させるか。
- 3, センター対策として、政治史・経済史・文化史・複合問題を苦手とする生徒にどう学習する生徒にどう学習指導を行うべきか。

研修第2部 『 教科内討議 』

ビデオ講義視聴後、各教科内において、自省・分析・課題について討議を行った。

『 視聴覚機器による研究授業 』（活性化事業共通）

全ての研究授業・公開授業等をビデオ撮影し、その後収録されたものを見ながら、各教科内において客観的に分析した。

反省会では、専門家のレクチャーと指導を受け、教員の学習指導スキルの向上と生徒の学力向上を図った。

事業実施にあたって特筆すべき点

『 地域学校関係者と生徒保護者の授業参観と授業評価 』

公開講義を開講するにあたり、地域との共通認識を確立すべく地域学校関係者と生徒保護者に広く案内をし、当日の参観を呼びかけた。

当日参観された地域学校関係者と生徒保護者、そして実際に講義を受けた生徒を対象に講義終了後アンケートをとった。アンケート結果は「事業実施による効果」として に報告する。

事業実施による効果

【校内における評価・変化】

公開講義については1・2年生が対象であったこともあり、難解な面もあった。しかし、センター試験での解法には論理的思考が重要であるということが理解できたようだ。実質的な効果として、校外模試受験に真剣さが出てきた。

【保護者の反応】

受験最前線の有名講師による生の授業は生徒の学習意欲に刺激を与えたとの保護者からの声があった。

【生徒の評価、反応】

90分の講義を始めは長いと感じていたようだが、よく考えられた内容と情熱により生徒達もやる気になった。今後の学習に活かしたいという意見が多くあった。

【教員の反応】

板書要件など、技術的に参考になることが多かった。

自分の授業をビデオ撮影し、客観的に分析してみたい。

授業の速度自体はゆっくりだが、内容的には色々なものが含まれており、密度の高いものだと感じた。

各教科で是とする授業内容を定める必要があると感じた。なかなか難しいことだが、教科部会を開き、「これだけは教えなければならない」という最低条件、教案を統一して作成する必要性がある。

ただ、教育の場の違いからか、授業が教員から生徒に対して一方通行であったと思うので、そこは学校という特色を出すべきだと感じた。

【今後の課題】

生徒自身が自分は学力がついたと確信するためにも、このような企画を今後も続け、教員も更に授業のスキルを向上するよう努力を重ねる。